
宝物

秋茄子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
宝物

【Nコード】
N3405A

【作者名】
秋茄子

【あらすじ】
大学生の柊子と、彼女の亡兄の妻、そして甥の拓馬が紡ぐお話です。

それは紅茶の葉が入っていた、小さな缶だった。

9歳年下の甥が、大事そうにそれを持って、縁側を渡るのを、私は見つけた。

「拓、それ、紅茶じゃないの？ダメだよ。勝手に持って行っちゃ」と言うと、拓馬はそれを抱え込んで首を振る。

「カラになつたから拓馬にあげたのよ。宝箱ですって」

冷たい麦茶のコップを乗せた丸い盆を提げて、義姉が開け放たれた縁側とは逆の、台所の方の襖を開け、黒い膝下文のタイトスカートから伸びた素足をそつと畳に侵入させた。

「へえ、宝箱？いいなあ扱」

私は義姉からコップを受けとり、口を付けながら言った。

「扱馬、お姉ちゃんに扱馬の宝物見せてあげたら？」

白い半袖のブラウスと黒いタイトスカート、それから汗一つ浮かんでない白い肌。紅を挿した唇だけが赤い、スツキリと涼しげな義姉が、優しい声で息子を手招きする。

「お、見たいなあ、見せてよ。扱」私も笑いながら、だらしなく延ばしていた足を、義姉のように畳み込んだ。

正座に慣れていない訳ではないが、小花柄のノースリーブの、クリーム色のワンピースの裾の広がり、なんとなく邪魔だった。

「柊子ちゃん、はい！」

物思いに耽っていた私は、目の前に突き出された紅茶の缶に驚いた。握り締めていた麦茶のコップの中で、氷がカランと音を発てた。

「…柊子お姉ちゃん、でしょ」目は笑ったまま、義姉が眉尻を下げて言った。

「いいよ、柊子ちゃんで。ありがとう、扱」

私は笑い、缶を受け取って開けた。

畳の上に、そつと中身を出してみる。

扱が正座した私の足の横に腹這いになって肘を立てた。

「わ、すごい」

私は笑いながら、ビールの王冠を手にとる。

「それね、お父さんに貰ったの。それで、これがユミちゃんから貰ったやつ」

扱馬が黄色のビー玉を指す指を、愛しく見詰めている私の耳に、義姉の声が聞こえた。

「あの人、酔っ払って、大きくなったら一緒に飲もうなんて……」
愛しそうに言って義姉は、そつと仏壇を見た。

兄は22歳で結婚した。

義姉は20歳で、当時私は今の扱馬と同じ10歳だった。

10歳の私にとって、兄は神様だった。

何でも知っていて、何でも出来る。

優しい神様がその正体だと思っていた。

それくらい兄は、私のお願いごとのほとんどを叶えてくれた。兄としてはただ単に当たり前に、歳の離れた妹を可愛がっていただけなのだろうけれど。そんな兄がただ一つ、叶えてくれなかったのは、結婚なんてしないで、というお願いだった。私以外の兄を独占する存在の出現が許せなかった、幼い願いだ。

けれど今、私の目の前にいる人と兄は結婚した。

その2年後に、ようやく生まれた長男の扱馬が、酒の飲める歳になる12年も前に兄が交通事故で亡くなり、もう2年になる。

10年。兄と過ごした年月で言えば、私と姉は同等だ。

けれど姉の持つ鮮明な思い出に比べ、私の記憶は頼りない。

だからだろうか、三十路を過ぎて尚美しいこの義姉に引け目のようなものを感じるのは……。

それともまだあの幼い願い事を引きずっているのだろうか。

しかし私は、兄が死んだ後から、彼の面影を求めてこの家に入り浸るようになった。

大体はこの仏間で、義姉や、彼女にばかり似ている兄の忘れ形見の
択馬と語らったり、兄の書齋で大学の課題をしたりしている。
後者は思い出に浸るといふより必要に迫られてだ。

兄は大学の理学部で講師をしていた。

私も、大学では兄と同じ地質学を専攻している。

だから兄の書齋は資料の宝庫なのだ。

「それでね、これが…、柊子ちゃん？」

一人、違う空気を吸っていたような明るい澄んだ声が、私を引き戻
した。

私はハツとして択馬の手元を見る。

義姉も同じような様子だった。

「ごめん、拓。何？」「あのね、これが、ヒロコちゃんに貰ったの」
拓馬は丸くてすべすべした、小さな石を私に見せる。

「…あんだ、何人ガールフレンドいるの？」

拓馬は少し考えて、三本指を突き出した。

「三人」

「未恐ろしいなあ、誰と誰と誰？ユミちゃんとヒロコちゃんと？」

義姉がクスクスと笑っている。

「柊子ちゃん」

拓馬が満面の笑みでいい、人差し指を私の鼻にピタリと付けた。「
あたし？…じゃあ、あたしも拓に何か宝物をあげようかな」

私はポケットを探り、小さなホイッスルを取り出す。

義姉がハツとして私を見た。

「いいの？柊子ちゃん…」

それは兄がくれた物だった。

兄の結婚に反対してごねていた私に、兄はこれをくれたのだ。兄ち
ゃんはずつと柊子の兄ちゃんだから、もし柊子が助けて欲しい時は
これを吹いたら、絶対助けてやる。そう言っつて。

私は義姉に微笑んだ。「あの時のあたしと同じ年の拓馬に、あげよ
うと思っつて持っつて来たの」

拓馬は笛を口に咥えて音を鳴らす。

ピーツと高い音が鳴ると、嬉しそうに、もう一度鳴らす。

何度も何度も鳴らす。

私は兄が死んでから、これを吹けなかった。

拓馬にあげようと思ったのは、代わりに吹いて貰いたかったからかもしれない。

「拓馬、柊子お姉ちゃんにありがとうは？」

「ありがとう！」

義姉に促されて、拓馬はそう微笑んだ。「柊子ちゃんにいい物あげる」

「いい物？」

私は首を傾げた。

「お父さんの部屋にあるの」

私は義姉と顔を見合わせる。

「でも拓、お父さんにお部屋に入っちゃダメって言われてたんですよ？」

「大きくなったら入ってもいいって言ってたよ」

拓馬は言い返す。

私は笑う。

「そっか、拓、背伸びたもんね」

拓馬が私の手を引く。

私は義姉の方を見て、頷くのを確認し、立ち上がった。「でも拓馬、あたしより大きくなるまでは、もう一人で入っちゃダメだよ」

「凶鑑見るのも？」

拓馬が私の人差し指と中指と薬指を掴んだまま私を見上げる。

「お母さんに見せてって言いな」

「はあい」

つまらなそうに拓馬は頷いた。

「で、拓はお姉ちゃんに何をあげるの？」

義姉が問う。拓馬は母親に顔を向けた。

「お母さんも見に来ていいよ」

拓馬は私と義姉を、兄の書斎へ率いて行った。「義姉さん、義姉さんは再婚しないんですか？」

「え？」

唐突な問いに、義姉がこちらを見た。

子供の前でする話じゃなかったかな、と私は少しためらったが、拓馬は私へのプレゼントを発掘するので忙しいらしいので続けることにした。

「もう2年にもなるのに、ほら、こんなに若いのに再婚もしないで1人でやっていくだけの、お金も仕事もあるんでしようけど、勿体ないわ」

義姉は苦笑した。

「…って、母が言うのよ。おまけに、義姉さんが再婚できないのは、あたしのせいだ、なんて」

「柊子ちゃんのせい？どうして？」

義姉が目丸くする。

「そう思うでしょ？それがね、お母さんに言わせると、あたしがここに入り浸るのが悪いんだって。彼氏も連れ込めやしないうって。失礼よね？」

義姉にも私にも失礼だと思ったのでそう言つと、姉は声を上げて笑った。

「なるほどね。…柊子ちゃんはどう思う？」

私は義姉の目だけを見て、しばらく黙った末、口を開いた。

「あたしの気持ち、言ってもいい？気にしなくていいから」

「ええ」

「拓を産んでくれたことに、何より感謝してる」

義姉は黙って私を見た。

「何ー？」

兄の机の引き出しを漁っていた拓馬が、自分の名前に反応して、こっちを見た。

「なんでもなーい」

「だって今僕を呼んだじゃない？」

「んー、見つかったかな？と思って…、あたしにくれる物」私は拓馬の傍らに移動する。

「柊子ちゃん…」

義姉が縋るように私を呼んだ。

「柊子ちゃんもお母さんも座ってて」

拓馬に言われて、私と義姉はソファに並んで座る。

「義姉さん、出来るならこの家をそのままにして欲しい。余所者を踏み込ませないで。ひっそりと。義姉さんには、ここの空気を乱さないように、拓と一緒にここにいて欲しい…」

「…私もこの家にいたいわ。懐かしくて恋しい匂いがする、この空気に、拓馬と柊子ちゃんと一緒に包まれていたい」

思いがけず自分の名前があがって、驚いた。

私はこの人にとって、余所者でも、内の人物でもない、ひどく曖昧な存在だと思っていた。

「柊子ちゃん、あったあ」

「…なあに？」

拓馬の元気な声に、一拍遅れてそちらを見る。

「これ」

拓馬が差し出したのは、小さな赤い石のブレスレット。

義姉が眉を顰めた。

「拓馬、なんなの？これ」

少しきつい声が問う。

ブレスレットはどう見ても女物だ。義姉の物でないとすると、大変だ。

死んで2年経った今になって、浮気が発覚するかもしれない。兄はそんな人ではないと思うが、ここに証拠もある。

「柊子ちゃんのだよ」

拓馬はニッコリと言った。

義姉が首を傾げながら机に近付き、拓馬の漁っていた引き出しの身を、整頓し直しながら調べる。

「あ…」

義姉が声を上げた。

「どうしたの？」私は姉の手元を見る。拓馬はそっぽを向いた。

「拓馬、柊子ちゃんのプレゼント、勝手に開けたわね」

「だって見つけた時、まだローマ字読めなかったんだもん、僕」

破られた包み紙には、To Shokoと書かれている。

ブレスレットが入っていたと思われる小さな箱もあった。

赤い石は、私の誕生石だ。ブレスレットは私の誕生祝いだったらしい。「拓馬、勝手に触っちゃいけないって言ってるのに！お姉ちゃんに謝りなさい」

義姉が拓馬を捕まえて私の前に突き出した。

「あーあ、怒られた」

私は拓馬の頭を撫でてやる。

「…ごめんなさい」

拓馬は言って、破れた包み紙と箱を私に差し出す。

私は差し出されたそれらの品と一緒に、拓馬を抱き締めた。

「拓、ありがとう…」

臍気だった兄の記憶が、思い出として像を結んだ気がした。

Endお読みくださりありがとうございました。拙い物書きですが、これからもいろんな話を綴っていききたいと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3405a/>

宝物

2011年1月19日07時50分発行